

第三十五卷 第六・七號

昭和二十二年十二月一日(每月一四日)發行
昭和二十二年八月十四日 第三種郵便物認可

荻原井泉水主宰

層雲

冬季號



大原十國



有隣亭蔵書

陶工 内島北琅著

新刊 古陶の味 隨筆集

著者肉筆俳句、陶器入

特製會員本 百圓(送料五圓)

著者は信州に住みつき、茶碗を作り、繪をかき、そして古陶の味をらいさんし、俳句をもものし、時には身邊雜記を楽しく書ためたものが此書です。ぜひ御愛讀を乞ふ。

出版記念

茶 盃 會 一口箱入 金五百圓

送料 三十圓

(茶盃御不用の方は小花壺又は香爐を)

兩方とも

申込所 長野市外安茂里村

内島北朗方

目次

机の上	井泉	水一
疎漏	井泉	水二
蟲聲唧々	井泉	水三
麗日壇	井泉	水四
菊日和	井泉	水四
一枚月且	莖	吉三
星と少年	星	童三
星童について	久	利三
星童殿紀譚	銀	八三
幼童と僕のこと	健	三三
東京俳談	宵	火三
清露抄	井泉	水三
關東大會記	莖	吉三
大會詠草中より	井泉	水三
明月壇	井泉	水三
句會通信	黎々	火三
河童	黎々	火三
月餘光	黎々	火三
制作餘談	秋紅	火三
かしがし	六	藜三
のぎく	あつゆ	藜三
くま	あつゆ	虹三
にる	魚眠	洞三

層 雲

昭和22年12月冬季號

第35卷第6.7號 (通卷411.2號)

机の上

井 泉 水

秋の日うつくしく取りちらして審いてゐられる先生

星 童

とき／＼庭先からたづねてくる星童は私が机にむかつてゐるところを、こんな風に匂に
して行つたらしい。「うつくしく取りちらして」と見てくれるのは、全くヒイキ目であつて
私は「だらしなく取りちらして」と思つてゐる。私は其をいつも恥かしく思つてゐる。
「明窓淨几」といふ言葉があるが、それほどでなくとも、机の上はもう少し整然としてお
かなくては、本當に魂の澄んだものは書けまいと思ふのだが、思ふばかりでなかに、其は
出來ない。朝、はじめて机にむかつて、一時間位は、いくぶんキチンとしてゐても、そこ
へ其の日の郵便がくる。電報がくる。返事を書く爲に便箋を取り出す。そのうちに、ヒ
ヒーの碗や、タバコの灰皿が取りちらされる。やがて、机の上は戦場のやうになつてしま
ふ。自分でも之を見てウシガリする氣もするのだが、然し又、一方から考へると、こうし
て机の上のものが、落着きを得ずして動かうとする態勢をもつてゐるところに、後
ろから押されるやうな氣持で仕事の能率が上るといふ心理もあるのかも知れない。洋齋家
のパレットといふものは、繪の具があちこちと亂雑に置き散らされてゐるものだが、それ
がかえつて製作慾をシガキするのではないかと思う。それはとにかく、誰にしても、自分
の仕事場といふものは、いはゞガクヤであつて、人に見られたくない處であるが、家の内
せまくして、應接室をもつヨイウがないのだから、致し方がないことである。

(十月廿九日)

疎漏

荻原井泉水

うちの子供が兄妹で何か云ひ争つてゐる。近づいてみると、机の上にインキをこぼしたのだ。兄の云ふところは——きつと、妹が此のインキを使った時に不注意にもふたを堅くしておかなかつたのだ、自分はいつもふたを堅くしておき、そのつもりでふたを持つて持ち上げよとしたら、落ちたのだ、と。妹の云ふところは——インキ壺を持ちあげるのには、壺の方を持つてすべきで、ふたをもつて持ちあげるのには間違つてゐる。自分は平生そんな取扱ひ方はしないから、ことさらにふたを堅くしておくには及ばないと思つてゐる、と。私が思ふのに、これには双方に理屈があると共に、双方に疎漏がある。もしその疎漏が一方だけであつたらば、無事ですんだことである。疎漏と疎漏とが重つた爲に、事がおきたのである。こんな風に、私はうちの子供にコゴトを云つたのだが、その當人の私と同一やうな失敗をやつてゐる。

さきごろ、私は旅行をした時、電車をおりてしばらくして、上着のポケットに入れておいた紙入を紛失したのに気がついた。落としたものか、スラれたものか、それは判然しないのだ。まさかスラれたとは思へないが、落したといふ感じもないのだ。そのポケットは、手帳や書類などをひんばんに出したり入れするので、ボタンはかけておかなかつたのだ。ボタンをかけておかない點に不注意の疎漏があつた。又、とかく、すべりやすい革製の紙入を他の物と一しよに出し入れすることに取扱ひ方の疎漏があつた。もし、その疎漏が一方だけであつたらば、無事ですんだことだ。その二つが重つた爲に、事がおきたのである。

落としたのか、スラれたのか判らないといふ事も、つまりは同じ事なのだ。といふのは、ボタンをかけておかない事は、落とす易くもあり、同時にスラレ易くもある。電車の中で、紙入や手帳を一しよに取扱う者をもしスリが見たとしたら、スリは其をねらうにきまつてゐる。つまりスリは、スリ易い物をスル。又、落とす物は物理的に落ちるやうになつてゐるから落ちる。だから、落とす易いといふことは、スリ易いといふことに外ならない。落としたかスラれたかその事實は何れにせよ、遂には、落とすか、スラれるか、どちらかを將來する情態にあつたことは間違ないのである。結局、落としたのもスラれたのも、同じことなのである。——二二、九、一〇

小言

満鐵がはなやかだつた頃——車中に警乗警官の乗込んでゐるのを、ナルホド満洲だなと笑ひたかつたが、今日では、日本が満洲になつてゐる。

×
満鐵の長距離列車には、一人がけのクレーンと三人がけのクレーンとがある。日本などはなか／＼もつて……。

×
アメリカの長距離列車は窓ガラスが作りつけで、開閉出来ない。——開閉する必要はないのだ。風はエアホールから適度に調節されてはいつてくるし、コーヒイは各車りやう毎に喫茶室が添へてある。まして窓から降り降りする必要はないからである。

×
丹那トンネルの中の暗いあかりで雑誌を讀んでゐる人がある。そして、明るくなつてから、彼は居眠りをはじめた。人生にもとき／＼トンネルはある。トンネルにはいつた時はしづかに目をつぶつてゐるのがある。そんな時に強てやらねばならぬ仕事はめつたに無いものである。

蟲聲唧々

荻原井泉水

○京都東福寺山内亦明院なる層雲社を訪ねゆく

秋のくれの 油掛地藏 このへんかとおもう 此の道
雨すこし 夕やけした道の 暗くなつて 松のある門
○此のころ毎晩停電といふ、ランプにて俊二と語る

ランプ、夕べは くらき うすむらさきに すこし つめたく
ランプの ほのくゝとした光も 膳の上の 心づくしな
ランプの きいろいろい世界で 秋の夜の 妻も子もある
一つ 秋の蚊がくる ランプは もすこし 明るくする
これは おひとりでといふ 秋は ふたりで ビール一本
そういふ事は 層雲に書きたくないことの 柿のたね
赤く 一口菓子をやうな 皮ごとあまくて 柿のたね
ランプの 灯影の 柿である ふかい甘さ である
では やすまして もらはうかと かきのたね
○床に入りてより眠るまで虫を聞く

ふすまの かたいことなど あるじ俊二 虫聲しよくく
東福寺の 虫の聲は、ランプを あんどうに する
うつくし あんどうの 紙の 水莖 秋の夜 あかるし
虫の聲 ならぬはなし かねたたき であり
あるじが まだ物書く音か 虫の聲 寝るとする

○翌朝

茂つたまゝ 草の かれたまゝの 芙蓉の 實も
松の枝は 秋の日、しめて きりばりが 返り花のやうな

添へ書

東京や京都では——此の北鎌倉でも——
毎夜の停電である。層雲社では、ランプを
天井からつるしてゐた。私の學生時代まで
は、電氣はまだ一般化せず、ランプで勉強
をしてゐたものだから、ランプといふもの
は（英之助に「おさななじみのやうな」と
いふランプの句もある通り）なつかしくて
好いものである。凡て、物は實益になつて
ゐる時は「效用」を主として「觀賞」の對
象とはならないが、それが實益から遠ざか
ると共に、その「美」といふものが見出さ
れるやうになる。ランプの如きもその一つ
である。「秋の夜の妻と子」といふのは、俊
二の氣持で、その氣持をこちらに移入して
作つたのだ。こうした「感情移入」といふ
ことも、一つの表現方法である。

「東福寺の虫の聲」は私自身の追憶感情で
あつて、前書を要するだろう、尤も「菊日
和」の中にそれは書いておいた。「ふすまの
かたいこと」の句は、俊二調といふものか
もしれない。俊二をモデルにしたので俊二
調をもつて書いたところに、此句の意圖が
あるのだが、そんなシャレはどうも感心
しないと云はれ、ばそれきりの隣である。

麗日壇

井泉水選

里井正子

月光やわらかくくだものむけてゆく
 あけ方月のあけてくるあかりでもある道の石ころ木の葉
 こころさびしく雲のいくつも夕日のいろをもち
 旅のなみをきいてみるのでもなく月明り少し談とぎらしてゐる
 星なみだのあたたかさ冷えてくる
 はなすことはたくさんありながら砂さらさらになぎつては離し
 山の秋のくうきの、のぼると向う海みえる
 夕日なんとなく山にドライブロードのみえるなど宿の藤椅子
 月夜湯の村あると二つ三つはっいてあま少し遅れてついで最終バス
 秋しまひごろの小さいはなつけてぬれるとはれる
 レベル 仰角 十三度都市計割線圖 一葉、秋
 こたつのうえの哲學的人間學の一冊、けふの平凡
 ひとみのなかをつきよにしておもうことなにもない下界の幸福
 じべたはなびらはだしであるきたいほどよる
 ぎんなんはたほたおちる圖書館のいしだんからの空外人教師(母校四句)
 ぎんなんのなるきめをふくとそのした催しもののピラがはられる
 この瞬ながくして女學院の門までさくらさきほこり
 學校の燒跡、に木の芽草の芽、に歌
 なみおと、おさないゆびにしてゐるほうたい
 岬のせみがないてゐるおけのラムネ
 風が、くぎ一本でとめである

淺井冬二

内藤善知

菊日和

井泉水

(上)

又しても旅に出て、今は歸つて——歸ると用事が
 山積してゐるのだが、——當分はうちに居るといふ
 フドカな氣持で、お寺の庭の柿の木の赤い柿をなが
 め、うちの垣根の黄菊の花をめでゐる。此の菊
 は、ものぐさの自分のこととて、すこしも手を入れ
 ないのだが、それでも毎年好く咲いてくれるので、
 實に愛すべきものである。それで、床の間の軸も、
 椒彦の「みたりな」をおさめて、銀坪の「菊」にし
 た。「東籬秋色」と題して、すつきりとした墨の色
 だ。で、秋は旅もよろしく、家もよろしと思つてゐ
 る。

x

こんどの旅は、京都、大阪、神戸と、いつも行く
 ところへ又も行つたといふ風なので、かくべつ「旅
 のたより」をかくほどの事もないが、——京都では
 明月亭に二日の滞在をした。そのあたり、モクセイ
 がいづことなくかをり、主人、例のごとくもてなし
 てくれて、昔ながらの京の秋を味ひ得たのである。

x

膳に秋茄子の色も京の朝しづかに曇り

みのむしよ、ふるさとであるこの家のゆすの木
 ふりやんで横になつてゐると降つてゐる
 雨できれいな月になつて出てゐる
 くれるとみると暮れてゐる一つの木
 さぎは白い鳥 稲田をとび湖の方へゆく
 大 櫻 ば た け が 月 夜 の こ う る ぎ
 ありがたし 朝 佛様にも白い飯をあげる
 こうしてあえば生みの母は母、うちわを手に
 母のゐない部屋ががらんとしてゐて母の煙草盆
 關 が 白 い 瀬 音 を つ つ ン で ゐ る
 山が、みづうみの中にもさかさまに秋になる山
 濃く秋空あかく壁土にんげん小さはたらく
 日曜こどもたち 栗おとしてゐた暮れるとかえつてゆく
 おくさん 張りも してこすもす 咲かせて白や赤や
 よるの驛を遠くして青い赤いしぐなるのむれ雨ふる
 あさひ 大きく橋のかげうつしゆつくり 荷足ぶね一そう
 黄菊こまかく咲いて女なにげなくまつすぐむいてゐる
 なわとび まりつき月が名月になつてこどもたちとゐる
 ひ ぎ かり 水 の ゆ く ひ かり て ゆ く
 水 に 白 い 花 が ひ ぎ かり
 ま け ば か す かな 音 の す る た ね ま い て ゐ る
 み ち に そ ふ は た け で ひ ぎ かり た ね ま く
 も い で う す も も い る の を も た せ る
 たねものまいたばかしのはたけと家とそこいら(迎井師)
 風 ふ き ぬ け に ふ く お の も お の も に 坐 り

大平羽人

松村邦夫

關口父草

句會は菊溪亭で催された。此の夏のはじめ、私が
 滞在してゐた其の家で、例のオバサンも猫も健在。
 ウグイスの鳴いてゐた叢林では、季がかわつてモズ
 がはれんぐと鳴いてゐた。床には、菊の會の爲に私
 が書いてあげた「菊」といふ一字の軸をかけて、菊
 が活けてあつた。大阪からも、神戸からも參會され
 て、にぎやかな集りであつた。

日がさし水につかつてゐる赤のまんま

千代吉

門のうち木があつて灯つて秋がよつてゐる

俊 郎

空は落葉はミシン踏むほどに揃えてゐる

六 郎

黒い牛が立つ遠くに低い秋の山脈

榮 治 郎

幼な馴染のやうなランプとゐる毎晩修電

英之助

これは、その會上の句である。

一日はまつたくフリーな時間が出来たので、南禪
 寺内のまだ見ないところへを觀賞した。先づ、方
 丈を明けてもらつて、國寶のふすまを見た。狩野探
 幽筆と傳へるもので、青龍展に龍子がえがいたも
 の、いわゆる「虎の間」と稱して、三案各三方、卅

名雪理輝

足ぶみ脱穀機の高鳴り秋この夕べ
稻のよく匂う道がうちへ暮れてゐる
朝から暑い日ざしの山羊を涼しい所につなく
青田で日照りつづきで毎日よい南で吹く
ふめば崩れる砂が炎天の松の木
岩に影が登鏡してゐる
たたみにまち針などほつと月が出てゐる
朝のあめ匂うほどにふりうちのトマトうすあかく
風吹く月のあかるさ石だん

品川幸一 耶

家々月の屋根港にていはくしてゐる
美しい物語をスタンドのそば編棒うごかしてゐる
釣具のかんばんそのとなり居酒屋春がこれから干潮になる
一ばんつけてこの浦の蛤の汁である青田の雨
花をリヤカア一ぱいにつんでゆくあさあき日
新刊ぎつしりと本の匂ひ木屋のその人通り初夏
教會のオルガンきこえ朝がしずかな梅雨のまちで
糊しごとひるからは秋海棠にもう日がない
南瓜のたねつとにてしまひ架けてそうしておく
浅やまかげ家みえきのことりあめになるらしくみゆ
木槿の葉すこしあめ來ではれてゐる花ついで
ははその木原なしてありとほりあめすぎさる
はたらくそら鳥がわたる

遠藤虹水

片岡樹裏人

波に消える口笛をふく
草ばかりに晴れぬく
古い木と白い壁の夕ぞら

親井榮牛花

六枚のふすまに皆、虎を圖してゐる、その中でも水
飲みの虎と呼ばれてゐる圖が名高いのである。「日本
案内記」には「筆力雄健にして生動の氣にあふれ、
金色と緑青の對照に極めて豪華な桃山式裝飾美をあ
らはしてゐる」とある。見るに、いかにも力のこも
つた出来ではあるけれども、昔は虎といふものを實
際に見る機會はなく、漢畫其他から想像をしてえが
いたものなだから、なんとしても生氣に乏しい。
これは龍子自身が青龍社パンフレットの中で、ひそ
かに自信のことばをもらしてゐる通り、龍子の水飲
の虎の方がはるかにまさつてゐる。

次に、南禪院の庭園を見た。龜山上皇が離宮造營
の時、作られたもので、「その池はいはゆる曹洞池
で、池中には數箇の小島があり、處々に景石を配置
し、やゝ荒廢はしてゐるが、清爽幽雅にして、鎌倉
時代から殘つてゐる山水園の標本として尊重すべき
ものである」と「日本案内記」にはあるが、昔、或
年にうしろの山がくすれて池の半ばをうづめて、池
中の島が陸つゞきになつて、それに木の茂るがまゝ
に放任してあるので、初めの造園者の意圖はほとん
ど没却されてゐる。但し、禪宗流に掃除だけは清ら
かに行きとゞいてゐるので、いかにも庭をながめて
ゐるといふ落着いた氣持になれる、これも京都とい
ふ土地なればこそである。

それから、金池院の方丈と庭園と八窓の茶室とを

月あかりで柿もいできたお客さんとゐる

上柿小平

門燈とユスモスが月夜で寝しづまつたそら

芒が池のまわりそこから嘆きまわる犬のうつり

星のなかの月が松林になる道

内田六郎

榎のへちま食卓から富士が暗れてゐる

ほうづきの赤さよかつてばくだんのおちたところ

あつさも日かげれば花たてのおみなえし

野菊や名をしらぬ草の花海へ入る川

ぞうぞうあらしいのちうまれようとす

たてがみ風うけて秋の日うつくしくいなく

雨とあられと白い遺骨をしかと抱く

朝あけた月を夕べしめるかやの穂

秋の虹夕べの水がめに水をたたえてゐる

にんにくくさくて寒くてはなしはそれだけ

男女青年教會月のいゝ晩ひとり歸る

ゆうべ名月けさすすきの穂白く風ふく

大豆の出来ばえの二百二十日しづかに入り日

向日葵の大きな實干しならべ雲の流れゆく

もすの聲けたたまし雲もないまま暮れてゆく

月が流れる川口芝居がはねてゐる

人生二人で月は空をあゝるく

山に音する雨の温泉宿のどびん

裏は竹山の禪居庵境内秋になる雨ふつてゐる

右は湯本へ、として雨の秋になつてゐて道

三日月、稲田のおもてみつうみの如く

水谷青史

佐藤専子

佐藤蚤明

見た。金池院は南禪寺の塔中のうちでは、いちばん
大きな寺だが、現に住職がゐるずに、留守の僧たゞ一
人居るだけださうで、荒れほうだいに荒れてゐた。
有名な小堀遠州作といふ庭園は掘りおこして、いも
が作つてある。方丈は何ヶ月前に掃除したものか、
疊の上に埃がつもつて、あるくと足の跡がつくの
だ。元信、尙信、雪信作のゝすまなぞ、よく盗まれ
ずにあるものだとおもふ位。群鴉をかけた大鴉小鴉
の屏風なるものは、破れたまゝに廊下の隅におしつ
けてある。保護建築物であるべき、八窓の茶室はネ
ダがぬけて、足を踏み込むとあふないやうな気が
する。明治の初年、いはゆる薩佛毀釋といふ運動の
おこつた時には、寺院の文化が一時メチャ／＼に
されたもので、それは如何にも惜しいことだつたが、
今日ふたたび、其と同じ危機にひんしてゐて、まづ
たく願はれてゐないのは困つたことではないかと思
ふ。

大阪では、天青居に一泊した。天青居こと、夢郎
の家はすいぶん山の中で、往復にかなり困難なのだ
が、京都まで出てきた主人が同行するといふので、
出かけた。こゝへ最初に來たのは、何年かしらんと、
今、改造社本の「井泉句集」を開いてみると、大正
十三年に「東郷村」といふ作がある。まさに、二十
三年以前のこゝだ。

でんしやがつくまでの驛の高き東京暮色

芦立陶抄子

細い月のそばに星があつて私が童話のなかにゐる
蔵の扉びつたりしめて月夜だけがあかるい
ねてからがいなづまがむらさきの孤獨である
月に も た れ て 壁 で あ る

原田赫城子

かげからでてきてかげと月夜
山 か ら 川 が 出 て き て 月 夜
月 夜 の 白 い 餅 に な る

北田千秋子

白き富士なら清き水なら又動にゆく
するめの味よけいせつの日を遠きむかしに
心のうつろにするめの足までたべ終えしか
おちば、おちる葉掃いてゐるのは神主さんで
あなたとゐて夜がしづかな雨ときどきいなづま
石、あめぬれぬれははれてゐる
ふるあめが傘にふり垂りほだのたり穂にふり
月があつて雲のうすぐらさである白萩
茶の花母とはたらけはあたたかし
柿の葉もみちの雨が一日納屋の中

鹽田正吾

散る木が散つてる髪結いさんの窓は髪結うてゐる
月夜の明暗は落葉する道の傾斜
すつかり枯れて白いてふは

印南健治

この頃めづらしい蝶が、種まいてゐる
食後のくすりのんで晩にするばかりの青葉灯ともり
萎れた花をすてたところも日ざかり
かみなりさんよらずに去んだはだかではたけに水やりする

菅崎道雄

茸山へわが細腰のすそを端折り
といふ句がある。やはり、今と同じ松茸ごろで、茸
山へ案内されたのだ。

軒にざくろ笑みくづるゝにまかす

といふ句もある。そのざくろの木も今は健在である
ものゝ、もう老いきつて、ことしは實が一つしかつ
かない、と主人の談だが、そのざくろがやはり軒に
垂れて笑みくづれてゐる。此の二十三年の間に、日
本そのものもだが、此の村にも、此の家にも、主人
の生活にも、すいぶん大きな變化があつたものゝ、
そのざくろは昔のまゝに、しづかに、同じ軒に實つ
て、同じところに垂れてゐる。こういふところに
「俳句」の本當の心があるのではないかと思ふ。夢
郎をはじめ「白雲洞」といふ別號をもつてゐた。そ
れを新しい氣持に改めたというので、私は「天青
居」と名づけた。そして——「白雲洞一天青」と
いふ一行書をかいておくつたが、それが新しく表装
されて掛けてあつた。

整る日は、懸勢口の電車へ連絡するバスが不通に
なつたので、一里半の道を歩いた。粟などが落ちて
ゐる山道であつて、主人に送られながら、句を拾ひ
ながらといふ氣持で歩いた。そして、西谷村に青草
居をたづねた。松林の丘の上にある家で、萩の花が
咲きのこつてゐる庭から、遠く大阪灣が見えて、清
閑の氣を満喫したといふ感じだつた。

くもつた空に枝があつて朝せわしゆく通つてゆく
 夕日が一ぱい、枯山が道をもつてゐる
 雀、水のをがれて来た雀か鳴いてゐる木
 月夜からとつて一輪の花がバスカルのことは
 ねむの花月夜のマスは海へ行く
 水のような空のした水のなかのあしのように生きてゐる
 夕やけ雲が水だまりのいてふ葉、に散るいてふの葉
 昔からここにある石に腰かけてさくらの落葉
 どこかでこのぎり立てる音冬の海風いでゐる
 栗のいががまだ青い村のいりぐちにとまつたマス
 雨ふるは、たけの葱をふとらせてゐる
 しぐれがぬらしたポストへ寄る
 子の泥の足もふいてやりいちにちもおわり
 草をゆく草の中一本の橋をわたり
 かゆすこしあまつたことは言わすなぐさめる
 朝は日のさしてゐる方へすすきのほ
 ある日は花を買ひに出たので賣つてゐる
 泊りにかまふ道がやみよがつきよになる
 よわいからだとかくもはたらいて柿の木に柿
 秋はめようがの味、そんなことも有り得よう
 霧につつまれた月のつきよの梨を手に
 雪の日はことしづかにくれるのでけんおん器のふた
 大根の芽、月夜としても明るい小便をする
 生れた目のいわしすこしこげたのもたべふしどにをるばかり
 かまきりの顔も三角、草枯れてゐる

堀切春風

武田桂

青木青華

物部卓郎

桐井あしひこ

佐藤龍

瀧山重三

神戸では、例の通り滴々亭である。すぐ隣りの神
 社の社務所が句會場に用意してあつた。神戸の楠の
 會は、耕兒逝き、井夢去り、詩外樓去り、一時、や
 や空虚の感じもしたのでつたが、近來、英之助を中
 心に、六郎、夏木の中堅どころが、昔の熱をもちか
 へしてきた上に、若手の人々が大そう元氣に作りは
 じめたので、なか／＼盛んである。主人の談に、戦
 争中、離れた所にある倉庫のいくつかが焼けた。層
 雲創刊號以來、一冊もかゝさず合本してある、それ
 はどの倉庫の方に入れてあつたかと、不安におもつ
 てゐたが、此のほど、其は焼け残つてゐたことが解
 つて、喜ばしいと云ふ。とにかく、層雲關係の書物が
 一番好くまとまつてゐるのは、此處であろう。これ
 が燒跡だらけの神戸なのだから、實にしあわせだつ
 と思ふ。

歸りしなに、又、京都に寄つて、層雲社に一泊し
 た。層雲社が京都にうつつてから、はじめて尋ねた
 のだ。東福寺の山内の一ばん、南のはずれで、永明
 院といふお寺がすなわち、層雲社なので、東には東
 山つゞきの丘をめぐらし、西には西山までの市中を
 見晴らし、門内松の老樹が多く、その樹の間に東寺
 の塔が隠見し——東寺の塔にたなびくものはカシミ
 ではなくて、バイエンであるとは云へ——山鳩が鳴

ランプに灯をいれてからがいよいよ雪もみぢの小白いしようにあんないを乞う母のかえりをくらくなるのをおとなしく待つてゐるすぐかかげる日へはしておく早春の月夜にして街路樹の影出でてゆく日がのびてゆく遠くに時計臺の針残雪光りこのアメリカの山のかたち(コロラド州デンヴァー)まりがころげていつたは見えてゐて蚊帳つり草つゆけし黄金蟲は金持ちだと子供が唱つてびんぼうしてるかあれぢ野菊なら月は明るく咲きつらなりたれか拜んでゐる佛さままんじゆしやげあかる目の見えてまだ降る軒裏の玉葱さりきりもすが精出してけふ中に轉るつもり月が出ると椰子の木さざ波立つとカマエが出て行く家は買うて住みて空は異國の空雪に雪ふる雀は一日うちにある山かげ父と子とが夢まく畑にしてゐるやしの月の光しむようなベンチにてのはなし木立の間にある空はあかるくて秋、家のあるのも今夜は月夜になる空が涼しいはたけのなす欠けても好い形の冬月でちよつと掛けたベンチ鳥貝海より上がる男の手の中をして夏の日一生この山に未帰してきた顔のしわ夕日みんながしじみじるたべてしまつたそのから逢いたしと思ふ紫陽花のはな大きく咲き

高崎貞之

徳永田芥子

小川千佳

有竹四郎

森田十雨

秦是道

下山一水

三田翠山

河重十九子

河重菊乃

片井溪巖子

北村九泉子

渡邊天仙果

岡本健一

氏家芳秋

き、かれたゝきが鳴く。いとところである。庭もなか／＼廣く、手入のとどかぬのは當り前だが、このへんは宇治に近いから、庭を少しひらいて茶を植えたらば好かるうとおもふ位。それから柿の木が三四本あつたらばいゝなとおもふ。久しぶりで、東福寺のシンチヨウの鐘(夜半零時につく)の音が聞ける、とおもつたが、それにも目がさめなかつた位、ぐつすりと寢込んでしまつたのだつた。

翌る朝は、東福寺山内を散歩した。通天橋の紅葉はまだ青かつたが、水音は朝かげにひゞい秋らしく、普門院のはき砂と苔の色も露けく、月華門の昔ながらに淡い朱の色に朝日がうつすりと美しかつた。

天得院の前も通つてみた。天得院は、私が久しく下宿してゐた寺だ。大正十三年以來だから、夢郎をたづねた時と同じく廿三年の昔である。そのころ、此處に出入りした人は、北琅、阿歩、冬川……今の「泉の會」はまだ出來ずに、「洛雲會」と云つてゐた頃だから、すいぶん古い談である。

京の春はわが寺のさくら一本
私の此の句になつてゐるサクラの木が門のうちに
有つたのであるが、今、見ると其が無い。多分、枯れて伐つてしまつたことかとおもわれる。おとづれて、尋ねてみる程のことではなし、住む人もすつかり變つてゐるのだ。私が居間にしてゐた部屋には、

師の最期のこの月この日緋帛紗さばくことか
 葉のちるきのふよりけふへ風ふいてゐる空
 松の葉 満月のかげもつてゐる
 庭に月が出て山栗のおちる風がある
 さくろ空から口あいて池に水まんまん
 そこまで送りませう外はよい月夜の夢の種
 山から海の水平線がなんとしづかな墓のあるあたり
 靜かに日のしづむ時の山の青葉
 坐ればさくろのむだ花に降つてゐるようでもある雨
 樹影も夏めく水にかげして朝ゆく
 灯のうつるのが刈田となつたくらさ、となりとなり
 何もかもぬれてふりやんでわづかな日ざしさむい
 寒九の雨にぬれてゐた屋根、の月夜
 月夜の月が朝となつてゐる草の體
 川向ひは二階家が多くて月夜にしてゐる、橋
 ベツムリ風いだ海も夏の汽車が煙あげてとまつてゐる
 しづかにふる雨のぎんのしづくとなつておつ
 とんぼうまひるのつきがゆうべとなるそら
 風もおちてねしづまつた家の上この木
 日暮しづかな山家をはなれると月がある
 畑物かたづいたあとにとがらし赤う雨ふつてゐる
 目鏡をかけると海がはつきりと秋
 水から出てゐる柱の時計ではある(水書三句)
 さしあたり必要の物と子供の手と土手がきれそう
 秋日のぼろ寺の屋根に干しひろげてぼろばかり

青木水仙花
 大月喜三郎
 積木晃楓
 矢内花子
 齋藤晴々子
 野坂清子
 角田重信
 桑原愚村
 金平二火
 金井三頁
 齋藤青圃
 河重更涼
 中村苔味生
 米倉久枝
 淨心寺 淳

今、どんな人がゐることか、人はかわつたとて中庭はおそろくものまゝたろう。

石のしたしきよしぐれけり

その石も亦、昔のまゝたろうと思つたのである。

歸つてきて、かれこれしてゐると、層雲東京大會が近づいたので、會の出句が毎日、郵便でとゞく。近くの星堂が毎日取りにくる。少しづつでも渡す。星堂と橋火と山口彦とが、トウシヤ刷の原稿をかい、印刷する。澤山に集つてゐるのは、幹事として、うれしいらしいが、用意してある紙で足りるかしらんと、シンプイでもあるらしい。私はアメリカへ私信のついであつたので、航空便で、大會のことを知らしておいたところ、舊に向うから、航空便で出句がとどいた。アメリカへの航空便は片道五日でとどく。此のごろ、日本では、中央郵便局の山猫争議とかいうもので、東京で出した手紙が、此の鎌倉まで一週間たつても、まだ着かない有様なのだから、郵便日程の點からすれば東京よりもアメリカの方がはるかに近いといふのが皮肉なる事である。

x

庭の垣根にある菊は、十月のタイ風にふきたおされて、地に伏してしまつた。それを引きおこしてやつたが、又伏してしまふ。見ると、そうした姿勢の方が、かれにとつてラクであるらしいのだ。で、そ

栗の落ちる音がそれから山がひつそり
 ほどまい雨となり眞打つ音がふるさと
 ひるが暗くて石のかけ鉦たたき
 はだしではだかて育つ子が嶺風秋となる
 水にはなにかさかなのゐて波紋秋の日
 てつぼううつてゐるはあちらの兵隊腰までぬれて稽州つてゐる
 木に柿のあかい八瀬は霧の中日が出てくる
 露草、たどん干し場は朝露のかわいてゐる
 嵐のあとも鳴きつづける
 月に潮のよくひいてゐる岩があつてぬれてゐる
 岩の上の白い燈臺が月夜で秋がすすしすぎる
 島は月夜石うすトントンつく
 木のかげあせをふいた手拭ひぎにしてゐる
 光つてくる星と雲にうすれゆく星と秋になる
 尾花やそのなかの花などかゝるいあめふる
 直線ばかりのビル街のジープのスピード
 新秋の遠山も見えて峠、別れるとする
 朝はもう寒い井戸端の雀です
 裏町もくせい匂う山門の前流れてゐる
 道のはるかしたを月よりも白い波がよせてゐる
 からの花女病身をしづかに歩いていく
 青空や山山や刈つては膝でしめては刈る
 砂地にゴマがなりました石佛さま合掌
 芒に流れながれよりては流れゆく
 秋のものよくみのりたるお供えしておまつり

大山澄太
 木村乙羊
 富永谷衣
 青まさよし
 降矢百峰
 阪部蝶三
 日向野秀策
 高橋政二
 山田こころ

のまゝにして花を咲かしたのである。夏のうも咲いてゐたアサガオでも、手を與へてからましたものより、地の上に勝手にはひまわらしたものの、方に大輪の花が咲いた。花を作るといふことは、その工夫に徹すれば立派なものが出来るのだらうが、中途ハンパなことをしてやるよりも、野放しにしておいな方が、自然であることの爲に、しぜんによく出来るものだと見える。

菊作ることもなく、好く咲く今年まだかりの住居

戻りて菊に明るき灯のある我家はよし

我家の明るい灯を殊更にうれしく、たのしく感ずるといふのも、灯のない夜の方が多いからであつて、このごろは、日本全國のいづこもさうであるうが、停電にはまつたく閉口する。東京まで行つて、夜に入つて歸つた時など、靴をぬぐ足元すらまつくらだと、イウウツになる。昔は「秋天高ク馬肥ユ」と云ひ、「燈火親シムベシ」と云つた。このごろは、秋の空は高くとも、食糧事情のために、馬も人も瘦せてゐる。秋の夜は長くなつても、親しむべき燈火がないのである。さきごろ、京都の層雲社に寄つた晩も、此の邊は毎晩停電ですと後二は云つて、ハリからランプをつるしてゐた。私は中學時代までは、

栗の穰うれてうなだれてゐる路が小徑になる
 いそがしく稻扱機のまわる音ももうすゞ雪のくる山が日光
 岸を離れると水は空いろ人に乗せて岸につきました秋の暮
 月が綿の花のような棉畑の月でありそよ風であり
 世界もいつしか一本のラヂオのニュースで柿の秋となる
 歸命盡十方燒香のけむり一すぢ
 蔓豆のつるの手のむちやくちやにのびる身邊多忙
 ひとあめ涼しく音をたててきてみようがの花
 干草たばねおわり十三夜の月となる
 馬の大きなからだ子供にひかれてゆく秋日あかるし
 海を出た月の女は手からすなをこぼしてきいてゐる
 出るに入るに秋海棠の我が家のあけもくれもたぬし
 流れにうつり花をさげればおひがんひより
 海のいろが緋のいろ山の秋暗れてゐる
 蟹がとれて蟹をゆで美しき皿今夜十五夜
 秋風の夕方の七輪のむきををかえる
 臥たまま食べさせてもらう、雲
 臥たままで讀む本の重たさよ、雲
 看護婦の手のかたい日や柔らかな日や、雲
 へちまの花ひとが死んだという月にひらいてゐる
 雲の美しさは朝のもくげです
 遠あそびが出来て夕空からあそんでかえつてきた子供
 石のおもて月の出とななる
 日がくれると浪音になつてゆく松の木
 そばが賢となる月夜となる寒い顔で通る

植田市館

新納香樹

増村辰郎

矢内樹一

細谷のぶき

三浦清一

小松さとる

一色如佛

ずつとランプで勉強した。一高の寄宿舎では、校内
 の發電所で電氣を暮こしてゐたが、カナリ暗いもの
 で、消燈後、ロソクで勉強する方が明るい位だつ
 た。大學時代には、東京では何處の家にも、電燈は
 ついたが、タンソ線の電球だから、さして明るいこ
 とはなく、ランプ掃除をする手数はあつたのが喜
 ばれたにすぎなかつた。その頃、スタンドといふ物
 は普及せず、天井からつるした電燈を幾分近づけた
 位では、辭書のコマかい字などは讀めないで、私
 は依然としてランプを使つてゐた。いわゆる空氣ラ
 ンプといふ圓筒形のシンを用ひたものは、かなり明
 るかつたものである。此の頃のやうに、停電で苦し
 められると、昔のランプの時代がそよになつかし
 い、ランプの灯に顔をよせるやうにしてゐると、そ
 の灯の熱温がほのかに感じられて、それこそ眞に
 「燈火親シムベシ」といふ氣持を味ひえたものであ
 る。

いま、私は一本のロソクを立て、此の原稿を
 書いてゐる。讀書にはデト困るけれども、原稿を書
 くにはロソクでも、けつこうである。芭蕉の逸話
 に、芭蕉が或る家に客に行つた時、食事がすんで、
 まだロソクが立てゝあつたので、このロソクは
 早く取つた方がいゝ（行燈にかえよといふ意味）夜
 の更けるのが目に見えて心がせわしくていけないと

ほんに台風一過といつた空に今朝は濃いお茶である
 ビルディング灯をぼしその上大きく月のある家に歸るホームで
 川の石 降れぬれぬれてゐる
 はぎの花降れば地蔵様もぬれてらつしやる
 襟もとの布團がひんやりして窓のそと月夜になつてゐる
 裸身秋雨にぬれ大きく手綱をうつ
 月をなくして白いてふてふ島へは橋があつて
 かぜが葉をちらすので障子の切り張りすんでゐる
 石の影が石にそひて名月となる
 鍋のものこぼれる程にふき山あひからの日さしも秋
 日さなかは家のうち葉のうごくみゆる
 親ゆづりのきせるで親の忌日である
 白いビルの空はばらいろのいろあせてゆく夕べ
 映畫館を出ると冬木に星がちかちかする興奮
 石ころ 秋を落葉がぬれてゐる
 ふりかへればふりかへつてくれる葉のちる
 天の川、城跡このへん霧噴井戸のあつたといふ
 學校はここも二部教授らしい子供達のさるすべり
 色づく柿も日は家にふかくさしひざのうへに
 住みなれて秋橋はへなへたと山からもどり
 もくげの花が雨はぬれ草刈にゆきます
 秋草畑のキチキチパツタ雲もなき日なり
 ながあめふりやんでゐる水の中の草
 山がいろづいて雨あがつてゐる水かさ
 秋の山に煙が立つまつすぐに立つてる

上野忠三
 古川紅雲
 小牧二郎
 佐藤鈴村
 中谷操
 長塚千里夫
 深見武朗
 安達俊郎
 横關碧樓
 齋藤てつ人
 酒井空史
 鹿島黙太
 小原甲陵

云つたさうだ。ロソクといふものはすんずと短く
 なつてゆくので、心せわしく感ずるといふ點もある
 うが、昔の日本のロソクは、シンがちら／＼とゆ
 らいで、またまきばかりしてゐるやうで、氣ぜわし
 い感じがしたものである。今日のロソク（私の
 少年時代には西洋ロソク、或はハクローと稱した
 もの）は、煙の光もゆらぐことが少くて、イライラ
 した感じがないのでいゝ。しかも、時の移つてゆく
 ことをハッキリと感じさせるので、時を失はずして
 晝かねばならぬといふ心の張りがしぜんと出る。電
 燈のあるのにロソクをつける物すきをするには及
 ばないけれども、ロソクの光といふものは、時に
 とつては好いものである。殊に、秋の夜、しづかに
 句を練る時などは、なか／＼いゝものである。

(十月三十日)

(下)

十一月三日の層雲社關東大會の日は、ほんとうに
 菊日和と云ふべき秋晴の好天氣だつた。會場たる國
 立博物館株内の應舉館も句會にふさわしい靜かな會
 場だつた。應舉館のふすまが立てゝある爲に此の名
 があるのだが、此の日は其のふすまを凡て取りはら
 つて、百疊あまりの廣間として使つた。庭は博物館
 の後苑であつて、丘があり、池があり、芝生があ

留守はとしよりとにわとりと柿が赤くなつてゐる
 つばめに葉があつて軒に月さししづかななり
 舟が舟ひいてゆく赤とんぼとんぼとつるんでゆく
 陽をいつばいに笑つたところ一枚
 道でひらひら散る葉で光がいつばい
 島に灯がはいると海にひと雨
 月夜のこんばん船がとまつてゐる
 梅の花が月夜うまやから顔出してゐる
 ラヂオがやむといつた雨がひるからやみ櫻のさきそうな
 秋晴れ睡蓮の白き名残りてさき
 瓦屋の發動機朝からうなる霧も晴れた
 暮れると山の姿も今年のほうたる
 水に月のある道で映畫はエロールフリンのよかつた話
 小鳥わたりくる蔭夢はもう黒い質で
 ふといつららのなかにくらしてゐるこゑ
 枝が來年の蕾をもつてゐる
 雲にある日の、ひつそり龍騰咲いてゐる
 それから降り止んで人影が帆柱のてつべん
 すつと石ころ道が月夜影多くなる
 日ざしミシンの音がコスモス白いカーテン
 蟹が月に迫つてゆく大きないちよりの木のりんかく
 月、菊をもちらつて歸る
 ちぎつて投げた雲へスタツキ振つてゆく
 箱植のなすびもいで朝、川にてすり
 コスモス雨にぬれて焼跡、ラヂオさこえてくる

山岸 稻荷

梅田 幸延

瀬川 水音樓

井形 春一

泉 大畹

平位 青水

増田 松雨

關口 江畔

福山 溪水

鈴木 芋村

富岡 草兒

泉 恩三

り、大きな美しい銀杏の木のあるのも層雲社に因り
 があつてうれしかつた。一體、層雲社の大會といふ
 ものは、昭和十八年ごろまでは毎年催うしてゐたも
 のだが、十九年十一月廿一日に、私の還暦祝賀をか
 ねての大會を開いたのを終として（その翌日から東
 京の空襲の火蓋が切られた）すつと中絶してゐた。
 戦争は終つても、種々の不自由なる事情がなか／＼
 大會どころではなかつたのだが、今年、五月、層雲
 社が京都に移つたのを機會に、京都で關西大會を開
 いたところ、大そう盛會だつた。それで、秋には關
 東大會といふ機運がしげんに盛り上つてきて、にわ
 かに、十一月三日にといふことに決つたのであつ
 た。で、十月號、それも十月半ばすぎに出來た雑誌
 にはじめて發表したやうな次第だつたが、それにも
 かゝはらず、來會者、六十名にあまり、句を寄せた
 者は百二十名にのぼり、すこぶる賑かな、會となつ
 た。互選、抜講、講評、會果てゝのち有志懇談會
 まで、まことに朗かに、又、たのしい一日をもつこ
 とが出來たのである。

關西—關東—と、かやうに對立的に考へる必要は
 少しもないのだが、交通の上からも時間の上から
 も、全國の社友を一堂に集めるといふことは困難な
 のだから、地理的に日本の文化の二つの分野であ
 る、關東を中心にした會合と關西を中心にした會合
 と、べつ／＼に催すことが、便宜でもあり、自然で

川が海になる秋、白浪の立つ見ゆる
 顔をあらおうとおりと流れのつゆけさ
 ふえやたいこやいなほのうれてにぎわしい道
 山があつて豆のむしるを干しひろげてある道
 朝の日さして石のうえを水流れてゐる
 ものにもたれかかり小菊はかたまりてさくものと思ふ
 そつとボールのはいるおとのあかるい夕べです
 さわら生垣の厚さただしく刈りこみ農家夏の日
 山小屋に入り口があり朴の木はまつすぐな木の肌
 そんなにお婆さんげんのしようにを干し雲が白く秋になる
 柳と電柱と土蔵には窓があつて二百十日が平穩
 つゆのはれると照る葉につつまれて花のしづかな
 露の子もつてみまいにきた
 こんなところにあつて駐在所のげんげもつてゐる村のこども
 病人のものすてにでて孔雀のおりのまえ通り夏めきて
 吾子よゆびぬきはめて冬夜のひかる針つ
 大きな船腹の浪がさわぎたつ冬がきてゐる
 ハツ手の花の門のうちも月夜
 松の匂ひ冬の朝のポスト、入れるとかへる影で
 夕やける阿蘇をそらに三部屋ばかりの宿屋してゐる
 雨が音にはならない夜の木のふかいかさなり
 宿の娘制服で給仕してくれるこの山のとろろというを
 冬の目青い目刺を吊るす
 このごろ紅葉の雨にちり門のうちをそとにちり
 芥焚く火の匂ひ曇つたままで短日終り

井手逸朗

藤澤せいじ

加藤稜秋

田中井夢

福永夏木

原農平

もある。五、六月といふ月と十一月といふ月も、一
 つは新緑のあざやかな頃、一つは菊日和の朗かな季
 節であつて好い。これから後も出来るかぎり、五
 月或は六月に關西大會、十一月に關東大會といふこ
 とを、層雲社の行事にして行きたいと思ふ。

層雲大會と共に、層雲賞を復活することとした。
 そして、本年度層雲賞として平松星童を推舉した
 そも、層雲賞といふものは、其の年度に於て、
 最もすぐれた作品を示した作者を表彰するといふの
 が本義ではあるけれども、すでに聲價の定つてゐる
 中老以上の作家は今さら新しく推獎するにも當らぬ
 ことだから、しぜん新進の人の中から擧げることにな
 るのは當然だ。それでこそ獎勵の意味にもなる
 う。そして、其の推舉の標準はその作品にあるの
 は、もちろんだけれども、たとえば花火を打ちあげ
 たように、パアツとすばらしい作品を展開したま
 で、スワツと消えてしまつた人か若し有つたとして
 も、そうした人に「賞」を出すことはどうかと思
 ふ。やはり絶えず努力して勉強してゐて、その努力
 の花が咲いたといふやうな人、それゆゑに、其の根
 に肥をして、その花がりつばな實をむすぶやうにし
 たいといふやうな人にこそ、授賞の意義があるのだ
 と思ふ。そういふ意味でセンコウをした末、いや、
 今回の場合は、センコウするといふほど深く考へず

日々山の種、或は色く日々山の土の雲

内島北川

世のはたけ赤い煙突子供本を讀んでゐる
それ、それ脱いだ下駄家族五月雨
句を拾つてゐると葉が落ちてくる

古林巴水樓

日和雨、ふる石路の葉のいろ
ひとときかなかなも鳴いて竹煮草枯るころは
南瓜型の南瓜ばかりで降つたり晴れたり

柳田流矢

水のあとにはひろくてそばの花毎朝寒くなる
さいるな粉を餅にしていたたく又好日
りんごいろづく秋ふかい朝又ひと雨

池田詩外樓

若荷の花とて咲いて若荷だけのそば
月がくるくしてをる山のかたち寝るときの蚊帳をつる
ていねいにたべてのこつたさばのほね

吉澤稻市

幼なく涙干つきし餅もつてきてくれて涙干おなごの子
お湯へ小さなかなならひ川の音い水寒いやうたしてゆく
冬の土へ圍つてしまつてお百姓さんのとほけてあるような日向である

木戸夢郎

降つたりやんだりしてゐる雪が明るくて太い樫に障子がしめてある
雨が降るので傘が降るので春になる筈葉ばたけ
ひよの鳥がどこへも行かないこの寺の冬あたたかく(鳴雨氏へ)

針金

昔酒を造つたといふ此井戸のしだ秋音くて日のさし
針金焼いて糸のようなのを結ぶ
此日よき日とか笹の葉のおと地鏡する

竹箴

栗の柔毛の針のように色づいて来たこのころ日和つづき
待てばバスがあるといふ茶店のやねにも南瓜がある

とも、かれ、星童が此の線の上にあざやかに浮び上つてゐるのである。おそらく厨雲の人々に一般投票をしてもらつたとしても、恐らくは星童といふことに一致したろうかと思はれる。

星童は聞くところに依ると、大正十五年、東京淀橋西大久保に生れたといふことだ。今年二十二才、純粹の東京ツ子である。お父さんはお醫者さんで慈惠醫大の先生もしてゐられた。戦災には、氣の毒にも、二度も焼かれて、甲州吉田町に避難疎開をしたまゝでゐられる。星童は現に、慈惠醫大薬部一年級に在學してゐる。通學の便宜上、獨りずつと東京に下宿してゐるが、もと俊二の居た北鎌倉の圓應寺のあとに移つてきて、いま、そこから東京へ通學してゐる。厨雲にはいつたのは、昭和十七年三月だといふ。入團以來、わづか五年としては實に進歩の早い方だと思ふ。

星童の作品の持ち味といふものは、一口に云へば、ハツラツとした新鮮味であつて、「若さ」のうつくしさである。「若い」といふことは、元來「未完成」「ナマ」「不熟」といふ意味に於て、俳句の道では低く評價されるものとなつてゐたのだが、いわゆる「完成」「老練」「圓熟」といふものに凡てが到着してしまつた理想境なるものは(それを假定すれば)それは「終止」であり「固定」であり「死」である他はないのだから、厨雲の道といふものが常に

風は山からふくこもをあむ軒をよかみ

戻りはつくつくぼうしつくぼうしと足が下り道です

よくねむれましてゆんべの虫がないてゐる

笥は水があふれる米はときこぼすまい

青海苔ほんに青々と干してそこの一軒

たべるだけはたべてゐて秋、木樨咲きつづく

地からあふれる水をのんでからはたらく

涼しい風の中の蓮の花の朝を運る

雜草の花が暮れるといつも同じ人たちが歸つてくる

山はるかに山の重なる秋の身一つに行く

雨がへちまの葉の風になりへちまのつる

さしてきてしみついてゐる日であるさぶとん

顔に日のあたたかく公園人中のひとりもよろし

久米の皿山と川おどさらさらと冬の日の道

すこしたかみになつての桑畑と青い海お正月

あかるい月夜になつてゐる家の横竹に笛

梅の花、日本のあたたかいことなども引揚者です

つばめたくさん道に下りて朝早い古いはたご屋のあるこの町

農林學校からもちらつた牛乳もち町へ出る一直線な道あつき

眞珠のようなどうもろこしの熱いのを皿に朝が涼しい

君の子を両手に、君をあんな山の上において歸るか(志乃竹君の死)

せい作おとなしく顔出してゐるとんぼとんでゐる

やけのこつた瓦、雀の子うまれてをる

葉鶏頭まづしくなつても坊さんはくる

信濃川は遠くに流れてゐる三日月落ちる

山本木天蓼

小澤武二

藤野番紅花

飯尾青城子

三好草一

小林銀江

生々たる生命の道である爲には、いつも「若さ」といふものを失つてはならない。層雲を一つの老木とすれば、その根元からみづ／＼しいヒコバエの枝がぬきんで、來なければならぬ。かういふ意味で、現在、層雲に若さを生かそうとしてゐる、そのホープたる人は、星童ひとりではない。近來、そうした若い作家が群生して伸びて來ようとしてゐる觀さへもある。これは層雲の爲に喜ばしい現象だともおもふ。そして星童は、そのトップにあるといふことである。

さきごろ、魚眠洞からの私信の中に――
「層雲九月、十月と見てゐますと、層雲ルネッサンスの到來をしみ／＼思はされます。これは層雲の老大家といはれる人々の手に依つてなされつゝあるのでなくして、むしろ若い一群の作家たちの常にたゆまざる努力によつて爲し遂げられつゝあります、これは層雲の爲にまことに幸たともひます。老大家連、或は云うでせう、感覺の近代性の波及なんて、流行の流行に過ぎないと、又マチェールの近代性などは更に流行の泡沫である……なるほど、之が流行にとまつてはならぬのは勿論ですが、此の近代性といふ課題の意識的波及こそは層雲のホルモンであります。層雲の動脈硬化を救うための、たしかにホルモンであります……」

塵おとでわかるといふ足むとを竹やみ木屏かほり

高橋 貞太郎

汗にむみてもうなむのほとりほつと雪むかれるとき
バラまだあかきつぼみを雪おいた山が今朝
夜々に月おそくなりそは畑の花しろし

木村 緑平

ひよこ草三味草その他は知らない花で咲いてる
先の蟻もうしろの蟻も走つ下ゆく
今朝はうぐひすを寺の藪にきいて通る
豆の花白いてふてふが句になりに来る

佐藤 露江

海に沿うて石ころ屋根ばかり秋の白い波ばかり
木障の匂ひほのかなるを遠山に雪

三日 日月へ 棟 たてして 去 んだ

江 良 碧 松

荒るる日のすさぶる海の表情であるいちにち
祭の宵の月がおそくてちようちん
朝露の牛の草刈つてそれからおまつり
月夜、わら打つてぞうり一そく

ふくろう 月の出となつてくもる

井 上 充 夫

風がふくので里芋の葉が稲のほが病院の裏
秋を頂まで畑にしてその頂の松の木へゆく道
穂に出た稲と蓮の葉と少し風ある工場のけむり
なんばの粉玉子いろの日にほしてほせたの

財 馬 阿 歩

たべあきた雀が遊んでをる木の枝
虫がなくあのころとおんなじように虫がなく

芋畑 嵐のあと 蝶がきてる

ひよるひよる吹かれてる鳥のさとうきび月夜

通夜にきておもうは亡き子のことの蚊とりせんこう

とあつた。それは單に彼の「家言」ではない。

俳句道といふものに本格的づけられてゐる自然閑寂の精神は永久に一つの指標である。これに對して、人生愛慾の眞實を表現しようといふ意向も亦、詩の精神である。これが時として、對立する。一が他を批難する。だが、これは一つのテーゼに對するアンチテーゼと同じ道理であつて、此の對立の間から生ずるセツサタタマによつて、我々の俳句道といふものが一歩一歩、前進するものと私は考へる。これを平易なる一例として談せば、若い人のいわゆるホルモンに富んだ句が、甘つたるくセンチメンタルにおちいる傾きがある。これは若い人自身が自分のニキビを自分で處理してゆく必要がある。つまり、一應はその感情の純粹さを是認した上で、そのセンチの甘さと取組んでそれを克服してゆくといふことが、俳句の道だと考へてもらひたい。又、老成組の人々は、自分の老成性といふことに、尻をおちつけてしまはないやうにたのみにい。つまり、自然閑寂の境地といふものが、禪のいわゆる「枯木寒巖ニ依ル、三冬暖氣無シ」といふ風になつては、野狐禪になる、死禪になる。それではいけない、そこで一べん出直してみるといふことも、十つの若返へりとしてたのしいことではないか——とかう考へてもらひたい、と思ふ。

(十一月五日)

虫鳴く月を匂になども老いてゐる

秋山秋紅夢

一 故 月 三

秋がはればれとくれてゆく水かな

筒井莖吉

夕べを懐あつて径があつて芙蓉の咲く

田中井夢

井夢の句から受ける感じは、井夢そのひとに逢つた感じとおなじく、まるまるとよくよかた、春風たいとうといつた風なものに充ちてゐる。類脱的なところがなく、神経的なところがない。

秋を 茄 子 の 花 が 繪 に な る

窓ぎわにミシンがあつて秋の雲が浮く

鳥の駐在さんも月夜であるたみのうちは

買つて一つきりのりんご一人きりの子供

井 夢

日向葵大きくて少年世のゆがみを知る

橋本夢道

道を 蝶々 が 雨 乾 い て く る

「さん」といふ敬稱、といふより愛稱は、人物のあるところどうでも附けなければならぬかのやうに使はれてゐる。

やつとバスに乗れたこともほつと生活の断片

遠にかつこうも雨の二階の顔はウイルヘルムさん

樂しみは一つ一つ食べて猿のように淋しい日

前が抱壺、後は筆者であるが例として掲げるなら無

暑い一日一日から急に秋が来た妻の近くゐる

年があけたらの妓が雨の牡丹も箱屋の國さん

こうろぎ大塚になき人は何事もいわずに寐る

敷であらう。「さん」のもつひびきには親昵性があ

松の木や幾多の人死に墓に致年きりつけらる

東松八洲雄

鶏頭が血よりも赤く人こんにやくを食い終る

り、童語的でははらかい含みをもつてゐる。井夢ら無

我慢をすれば食べられますこんな風な配給の列

「さん」はなにかおさまるものがびつたりおさまつた

月皎々と貧乏一と月づつ切り抜けてゆく

感じである。「四國の南端の此の小都市の朝夕は心

つ き が つ き の い ろ に な る 木 の 肌

のどかで」と井夢が云ふとほり、現在の生活環境は

神話とみつ豆の看板秋のくだものは神代からある(銀座六句)

彼の性格にとつてうつつけであり、清流に放たれたふなのやうに彼の詩はますます生新な響きをもつであらう。

聖書館のよこの大きな「タイム」の廣告秋の日が一ぱい

であらう。

柳も秋の夕日にちよつと香の匂ひが鳩居堂まえ

月のある晩は河岸のカストリなんどもれんの中まで月夜

盡どきの日がコートヒー館のコーヒーと青兎の青白い繪

千匹屋の豪華な果物朝の目店のおくまでさしてゐる

つきのあかるさ石の上にあてないてゐる

咲いてあたたかな山から水がくる梅

と一粒一粒雨が乾ききつた大地におもむる雨
松のなか道は海へ降つて雨のしづかな秋
秋茄子小皿にとりてうつくし醬油のいろも
祭の近い太鼓の音も引出しみんな引きあけて秋
十六夜は松に一雨すざた白い雲の月
珊瑚珠のかんざし小さいお婆さんと彼岸花のさくみち
蓮の葉、池のすみに洗ふ障子の二三枚浮かせておく
菱とり窓にのつて池の藻に西日がからみついてをる
かがしのおどけてゐる故里は今年も豊年満作
煙草屋のある日も私も椅子持ち寄つて見てゐる月がいま雲の裏
それからも杖を花をもつ厄日の茄子の木がしづかな
風の中唐きびにすがつてゐる雀このへん躰跡
とんがらしおほかたは赤く染まり秋日和かたまる
政府インフレ防止に懸命風の目大根まいてゐる
けさの日の出を拜むきもち此のころ大根ぐんぐんのびる
聲の透り鳴く百舌鳥に日の出て日ののぼりつめる
二百十日の風おとこ大戸にとつてひきあけようと
へやのそとのしおんの花病人居るとのこと
この頃もくげ約束できてるお針に通うてる
ほすすき汽車に句稿がつてて京都へ明日はつくころ
秋の日まえになりうしろになり郵便配達してゆく
山と二三軒向う秋が透きとほつてくる
秋の夜階段のぼりてガラスに星が二階
日和うまがそろうて尾をふり縮つけにゆく
確にそうでうしろすがた木樫がくぐりゆく

小谷 信 人

堀 英之助

大越 吾亦紅

この「梅」は秋の梅の「梅」ではない、叶が赤い
「山村早春」のふん園氣が心のどかに胸にくる。非夢
の血のあたたかさがまた鑑賞者の胸を衝くのもあ
らう。

松尾 敦之

敦之の句をつつむ南國的な空氣の朗暢さと、エキ
ゾチックな風韻を筆者はありがたく思ふ。そしてそ
れはなにか追憶的なものをもつて迫ってくる。その
むかし「桃にべにがついて浪音」と歌ひ、南國の「す
もも色の雲」を詠嘆した益雄と平行して、敦之の句
の南國情調は筆者をかんげきさせたものであつた。
繪硝子のけんらんと異國調を詠つたのは、そもそも
敦之であつた。しんげんな、處つめたいカンリツク
寺院の切支丹的傳奇の匂ひのする空氣を描いたのは
敦之であつた。

戦争は敦之の世界を一朝にして烏有とした。「原子
ばくだん跡」と云ふ一聯の作にみるあくまでリアル
な客観描寫は、血をばくどくより、恐怖である。
歩きならせてはなは橋まで、あめんぼう

つまよまたきたよおまへのすきなこでまりたよ
二十二句中この二句が敦之らしい筆觸だと筆者は
思ふ。運命の逆轉、精神的動亂を経て敦之の句がど
んな指針を示すか筆者にはまだわからない。が、南
國の山に海に彼一流の花をさかせる日をまた期待し
たい。

星と少年

平松 星童

こどもにみつからなかつたまりがまるくてまつつきよゆきのよみかんのひとふさひとふさいでんきがついてゐるような秋の日つよし少年ぼうしたたきつけいていかるはよしひとにはふれてもらひたくないさびしさ葉がぼろぼろおちる星がふるよるな待ちぼうけあいたいとだけびしよびしよのはがきがいちまいこどもがあそんでゐるあたりことにまぶしくてあきのひ秋の日遠くにみえる學校がきこえるときびしいきりぎりすですよくねむる一個の白い猫がラヂオ秋の夜みづみづしくかたつむりめをのばすのがあらしのあと虹のあとの田んぼに白い薺がみだれお巡りさん戸籍しらべで見おろすと煙はいて汽車が動いてゆくのも秋が地圖のような風景猫のように少女がきておいていつたランプ、ランプがあかるいつつまでたつてもかえらぬものをいつまでもまつ海なりランプまよなかつとめがさめてみづをのみほしをみてひもじき秋の日うつくしくちらしてかいてをられる先生散りそうで散らない葉のうらがえし大きな柿にむしやぶりつきすこし静かにたべ、考えることするいきもつかずにみづのんでいきついでゐるいきトルストイ少年時代をよみ、秋の少年のはるかさへ散つてゐる葉こどもだいてこんなにかるくつきとそのかけ坐布団うすくて四角くて口に夜食のねぎのほひが残つてゐる

星童殿紀譚

鎌倉 銀八

憂いことばかり糠雨の如く降りしきりこれは日頃安吾や久彌が燈明を止げて拜んでゐるオノレ・ド・バルザック先生の句である。もつと詳しく云えば「まこと今の御時世たるや、憂いことばかり糠雨の如く降りしきつて身を濡らし、はては身内に滲み透つて、大方の衆に氣晴しを興えることを社會善としてゐた往時の風儀も、まさに消滅せんとしてゐる。」とは先生が「風流滑稽譚」の一節にてでくる文句である。が、今や糠雨ごときなまやさしい御時世ではないのであるのに獨り賣春のベルモットを飲みながら巷に雨のふるのを眺めてゐる。手元の日記をべらべらめくる。するとそこには「戀愛とは賣春の趣味に他ならぬ。如何なる高尚な快樂も一つとして賣春に歸せざるものはございませぬ。そうして至上の賣春者は神様である。」とボードレール先生の言葉が妖しく記してある。それをみて星童殿は猶悦して又一べいやる。だから彼の句には賣春へのノスタルジーが初めから終りま

平松星童について

菊岡久利

僕は、平松星童君に戦争中の誠實以來大へん好意を持つてゐるので、會ふと甚だ直言してはば文化的スバルタ訓練をしてゐるように思ふ。人間の「感」なんていふものは仕方ないもので、平松の星童といふ名も第一に僕には氣に入らぬ。青くさい内容のない投書青年を思はせ、もつとも可愛いとか、美しいとか思へない。平松君は僕には割に神妙だが、僕の友人たちと俳句の議論したりしてゐるのを横で聞いてゐても殆んどなつていない。小生意氣でさへあると思ふ。平松君は僕によく彼の俳句を見せるが「まだまだ」と思ふ。しかし平松はツミキ座のことや、慈惠大學の演劇部の仕事や、層雲などの雑用ともいふべき仕事に於いては、實に誠意と根氣をもつて當つてゐる、友誼にも甚だ厚い。この少年は、ひとかどの才氣もあるが、そのうちに才氣と袂別し、平凡に、散文的な勞作に戻る日もあらむかとたのしみにしてゐる。

先日「現代俳句」に推薦句が掲載され、彼の略歴に、詩は菊岡久利門とあつて實にびつくりした。平松の詩など僕の門でもなんでもありはしない。彼は僕の年少の友であるにとどまる。僕は幾百の詩を蓄く友があるが門下なぞ一人もある筈がない。

おそらく、荻原井泉水氏も、平松君の汚れない清潔な眼を愛し、こまちやくれた言動を暗に戒められながら彼を激勵して居られることと思ふが、彼が歴史ある「層雲」の特選になるとすると、友人である僕はいよいよ殿しく彼に三十棒を與へねばならぬことを意味する。

彼が學生でなくなり自分でめしを喰ひ、女なぞも作り、子供なぞを拵える時まで僕は彼を信用するわけにゆかぬ。平松も身體を丈夫にして、世間によくある、天才追悼に終つてはならないと思ふ。よく耐えて、僕の打棒もしのばねばなるまい。

平松君。僕は青年だが、君は少年である。僕の直言などより恐るべきは、一應整頓されてあるかに見える君の觀念を、生きてうごめく君の肉體の生活の道がどう崩すかといふ時に、實に君の汚れの受入れ方と、矛盾を肯定する方法によつて井泉水氏も君を「大人の部」で認められるのではないかと思ふのだ。世間の面白味はこんこんとして盡きせぬ。

「門下生」流れ、いふやが、俳句ならぬベルモットを、たたりたりとわが煙し、世に降りそゞいでくれる。それが共感となり一轉して萬人の法悦という加持力の意味を持つようになる。ちようど宗教術のあれのように。ともあれ「歡喜に生き給えや」とはフランソワ・ラブレエ先生が名著「ガルガンチュワ物語」劈頭第一頁の句なのである。けれども私だけは生憎くと野暮な下戸である。だから彼が秘藏の酒瓶の空になるのを一日永しと待つてゐる。擲論逆説ではない。

幼年

橋本健三

幼年は記憶のなかの祭
春の日はぼうやうたれど
ろんろんと

秋の夜はさんざめく
灯のごとく袋のごとくけざやかに
幼年は記憶のなかの祭なり

平松星童と僕のこと

岡野宵火

「宵火さんはどうもコワイ……」僕の顔をみると、星童は恠んなことを云ふ。云つといてから恐戯さうな目つきをすると、ニヤニヤと暗い齒をのぞかせて笑ふ。コワイ、といふのは僕の作る心理的な句の或るものを指して彼は云ふのだが、これは勿論、彼の生得の社交性が云はせる無邪氣なお世辭であることは判りきつてゐるのだが、そんなものに貧しい野心をかきたてては虚しい努力を繰り返してゐる僕にとつて、さうした諷刺めいた言葉はなんのことはない、そつと隠してゐるひぜんをそれとなくくすぐられてゐるやうなものなので、少々血のめぐりも遅く、人の好いばかりで取柄のない僕は最早他愛なくスキだらけにさせられてしまふのだ。一表面はニヤニヤ笑ひで應じてゐるものの、どうして、腹の中ではゲラゲラとたらしなく喜ばせられてしまつてゐるのだが、彼自身はそれで小搖ぎもみせてはをらず、次の瞬間には矢繼ぎ早やに鋭く切りこんでくるのだ。だから一廻りも齡の若い彼の前に、僕はいつも憐々の態たらくで星童宵火の會見はいつも僕の徹底的な敗北で終焉を告げるのである。これは一體如何した譯なのかと思かにも考へてみたことがあるが、——いや、いくら僕だつて一片のお世辭だけでそれ程へこまされてしまふ譯もないのだから——それは他でもなく彼の比類なく美しい笑顔にあるのだ、といふことに氣がついた。なんかの花びらの

揺れさざめくやうな彼の笑顔にはなんとも抵抗の出来ない覺力のやうなものがあり、僕は其奴にいつもしてやられてゐるのであつた。今年とつて若冠二十二才の彼は實に色々なことを知つてゐる。殊に平常僕の知りたと思つてゐる藝術上のことや人に就ては、恰で僕と年齢を逆様にしたやうになんでも知つてゐて、いとも平然とそれ等に就て語り、その都度僕を感心させたり羨しがらせたりする。尤も彼は専攻中の醫學に就ては大した興味を持つてをらぬらしく、餘りいい學生とも云へないやうではあるが……。

彼は恠んなことを云ふ。「こんど僕等學生仲間て演劇をやることになつたのです……、ええ、生活の探求といふ、島木健作のネ」さうして輿の中から台本と稱するセリフを刷つたものを出して見せながら、彼の扮するながしといふ醫者の役に就て、その難かしさに就いて話して呉れると、僕は、ハハウ、とかなんとか嘆聲を發し小首をふつては、自分には全く縁のなささうな印刷物に恐る恐る眺めいるのである。そしてこんどは、こつちから自分の畏敬するある未見の詩人に就いて語り、一度會つてみたいなどと洩らすと、「ああ、Nさんなら僕すこし知つてます、溫和しいいい方ですよ」と事もなげに彼は云ひ、またしても僕は完全に煙にまかれてしまふのだ。そして、ではこの齡下の友達に紹介して貰はふかしら、などとつづまじやかな希いをおこしたりもするのだ。

彼は僕を訪ねてくる時は、いつもまことに突然にやつて来る。どうかすると、行く、行くと何遍も前觸れをしておきながら一向姿が現さず、忘れた頃になつてヒョッコリ顔をみせたりする。過去四年餘、その内の僕かな期間を除き殆ど病弱な跡を引籠らせてをらねばならなかつた僕と星童との友情は、斯のやうに時折り彼が萬年床の

備を助けて呉れることに依り濡められていたものなのだが、
彼が始めて便りを呉れたのはもう四年程前、既に太平洋戦の様相
が日本の態勢に崩壊の兆を見せはじめた頃、僕が武蔵野の雑木
林の中の白い寮舎に謙虚な生活を送つてゐた時分のことであつたか
ら、彼は未だ十八才の蕾のやうな稚さであつた譯である。彼の書翰
から僕は餘り健康には喜まれないが詩藻豊かな一人の中學生を想ひ
齎した。

「……今日も白菊が、私の小さな庭にも咲いてゐます。あるかな
し風の風にほのかに香つてゐるやうな凜とした中にもやさしい花で
す」この様な香高く清々しい彼の便りの終りには、幾つかの美しく
獨創的な句が書かれてあるのだつた。

白いあめが水晶のなかのくさ

十葉の花や年とつたくすりうりがくる

こうした將來の豊かな大成を想はせる作品は、僕をしてここにも
また一人の大きな句敵が存在することを畏れさせずにおかなかつ
た。事實、その後の彼の生長ほど目覚しく華やかなものはなかつた
であらう。彼の作品は次々と特選として發表され僕をして唯唯然と
らしめるのみであつた。

間もなく覺束ない健康を取戻した僕は、はじめて出席したある句
會の席で偶らずも、この俊敏な少年と顔を會せた。少し定刻に遅
れ、學生服の腰に汚れた手拭をぶらさげ、素足でベタベタと會
場の廊下を歩いて来たまことにパンカラな彼を、あの繊細瀟灑な句
を作る星童だとは一寸の間納得出来にくかつたものである。その
日、歸路を共にした僕たちは水のやうに流れて盡きない句話を途中
で電車を降り、こつたかへす新宿驛のプラットの人群れにもまれな

がら話しこんだものだが、思へば僕の二十歳の終りもつかい其頃
日は句友星童のことと共に今は流かな川のやうに懐しい想ひ出であ
る。

星童は最早すっかり成人した。この春、僕は再び床に臥してゐた
が、久し振りで彼に手紙をやると、返事を寄越さず例の如く不意に
訪ねて来た。彼は以前よりづつと肥り、髪を美しく伸ばして實に氣
持よく潑刺としてゐた。青春の黄骨を行きくたやうな僕には、い
ま蕾を開いたばかりの彼は華やかすぎて眩しくて仕方がないのだつ
た。こぼれるほど明るく花をつけた梨の木が時折り開いた窓から白
い花びらを投げいれ、僕たちは長く話しこんだ。

先日傳された日本橋の俳談會には暫く躊躇つた擧句、このこと
出掛けていくと、星童は眞先に僕を見付けて例の笑顔を投げかけて
寄越した。歸路は、今日はこの儘山梨の實家へ歸るのだといふ軽い
ルツクサツクをぶらさげた彼と二人になると銀座をゆつくり歩い
た。少し疲勞を覺えてはゐたが、久しく見ない銀座の宵になにか珍
らしく、ところどころ店を閉ぢてはの暗くなつた舗道を歩きなが
ら、ふと僕はポケットから小さな館の二つ三つをとり出し、星童の
掌にもつけて、口へ放りこむと春ではないが空には朧の月がかか
り、僕の心はいつか溢れる水のやうに優しくなると絶えて
思ふたこともない死んだ女とのそをろ歩きも靜かに倒されてくるの
だつた。さう——、さう云へば苦しい戀をしてその女房を匂々と失
つたヤモメ男の宵火はいつでも何かに戀をしてをらねば氣のすまぬ
男であつた。僕はとうやら今度は平松星童に熱い想ひを寄せかけて
ゐるらしいのである。